

自動運転バス書店「ぶっくらっぐ」の提案

Driverless bus bookstore “Booklag”

野島三千留

指導教員 江南仁美

サレジオ工業高等専門学校 デザイン学科 視覚伝達デザイン研究室

無書店地域での本と出会う機会喪失を防ぐために自動運転バスを利用した移動型書店での地方創生を図る。本研究ではホームページ、パンフレットでの情報発信に絞り提案を行う。

キーワード：書店、地域コミュニティ、情報メディア

1. 研究目的

近年書店の減少に歯止めが効かなくなっており、各メディアでも度々取り上げられている。実際に日本の書店数は 2003 年には 20,880 店だったが 2023 年には 10,918 店と半分ほどに減少している。また、書店が 1 店も無い「無書店自治体」も増加しており、全国の自治体の約 26%が無書店自治体になっている。

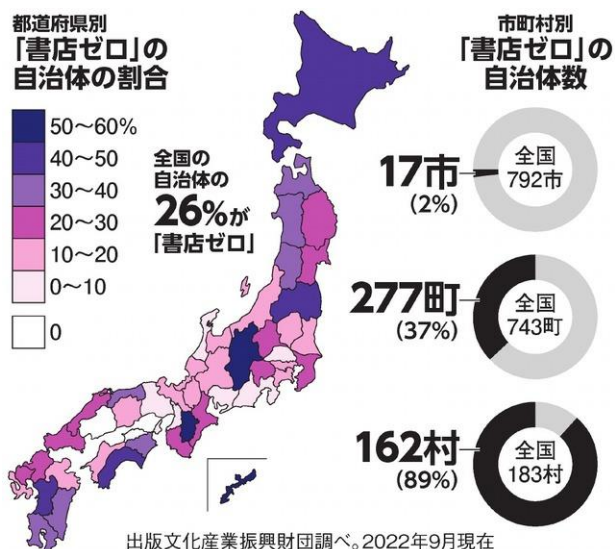


図1 無書店自治体の割合

書店は本と人をつなぎ、生活を豊かにする役割を持っている。書籍の販売だけに留まらず、本との偶然の出会いや思わぬ興味が喚起させるなど。新しい書店の形を提案し、「町の本屋」の未来を創造することが本研究の目的である。

2. 調査内容

①書店への取材調査

書店の現状と今後についてより理解を深めるために書店経営者の方へ取材を行った。結果として「書籍の売り上げで店を成り立たせるのは難しい」ということがわかった。元々、独特の流通システムを持つ出版業界は各事業者の利益率が低くなる仕組みになっている。取材を行った書店でも 1)コミュニティスペースとの提携、2)古本の販売、3)移動型書店との同時運用、この三つを行い成り立っている状況であった。取材ではその場所が持っている潜在的需要を活かし、コミュニティの提供やイベントの開催など本を買う以外の役割を与えることが今後の書店に求められるという見解を得た。



図2 取材協力書店、団地内テナントにて営業中

②企業への諮問調査

研究を進めるにあたり自動運転バスでの移動型書店が現実的にみて実現可能な案なのか、書店チェーン A 社と自動運転技術の活用を行っている B 社に諮問を行った。その結果「技術的、運用的な課題をクリアできれば現実的に実現可能なプロジェクトである」との回答を得た。

〔技術的課題〕

現時点での完全自動運転技術には完璧では無い。システムトラブルや不測の事態が発生した場合の具体的なバックアッププラン、事故時の責任の所在についての明確化が必要である。また電源の確保、車両ジャックや盗難などに対する防犯対策が重要になってくる。

〔運用的課題〕

取り扱う書籍選定と管理を慎重かつ効率的に行う必要がある。また天候や地理的な影響を受けた際の代替手段やサービス提供の方法を検討することが求められる。

他にも顧客との関係構築のためのサービスやイベント、メディア運用が不可欠である。

以上の2つ調査から新しい書店には少ない顧客数、人手でも運用可能な販売形態とコミュニティとしての価値提供が必要であると分析した。

3. コンセプト

本と人、人と人を繋ぐコミュニティとしての書店をコンセプトとし、移動書店に自動運転バスを利用することで新しい書店のあり方を提示する。自動運転バスを利用することで人手不足の中での出店ハードルを下げると同時に、複数の自治体を周ることで市場の小ささを補う。また、無書店地域の大部分を占める地方においての高齢者割合を鑑みたデジタル媒体以外での情報発信と、地域に沿ったイベント開催を行うことで地方社会でのコミュニティを形成し地方での問題の1つである社会的な孤立を防ぐ。

4. 最終提案物

情報発信のためのホームページとパンフレットを作成する。メディア内では運行ルート、書籍ラインナップ情報、イベント情報、取り寄せスケジュール等の発信を主に行う。



図3 サイトトップイメージ



図4 パンフレットイメージ

5. 今後の展開

作成したホームページとパンフレットの使用感についてアンケート調査を行う。最終的には新しい書店のあり方を提案し本と出会う機会を守るだけでなく、働き口の拡充、社会的な孤立を防止し、将来的な地方創生が見込める。

6. 参考文献

- 1) 朝日新聞社、“書店ゼロ自治体、全国26% ネットでの無料配送規制の議論も”朝日新聞デジタル、<https://www.asahi.com/articles/ASR3W6QSFR3WU LEI005.html>、(参照 2024-4-27)
- 2) 公益社団法人 全国出版協会、“日本の書店数.” 出版科学研究所 ONLINE、<https://shuppankagaku.com/knowledge/bookstores/>、(参照 2024-5-13)